

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月 4日現在

機関番号：12603

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20720236

研究課題名（和文）東アフリカにおけるセクシュアリティの変化と「シングル」の生活戦術の可能性

研究課題名（英文）Changes of sexuality in East Africa and the possible strategy for "single" peoples.

椎野 若菜（Wakana SHIINO）

東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所 准教授

研究者番号：20431968

研究成果の概要（和文）：本研究では、ケニアとウガンダという二つの国家、また都市と村落における主にシングル女性に注目し比較研究を行った。ケニアでは、村における伝統的な性、結婚の規範から逸脱した女性と、都市でキャリアをつみ働くシングル女性が、相互扶助的な関係性をむすび同居家族とも呼べる形が生まれていることが観察された。

ウガンダ北部は内戦のため、外国からの介入による文化的影響が大きく、性の規範、また伝統的結婚がくずれ、シングルマザーが増加している状況、女性の就学と自立がより期待され、実践されつつあることがみられた。

研究成果の概要（英文）：In this study, I have done my research in Kenya and Uganda. In Kenya, I focused on single women in Nairobi and a Nilotic Luo people's village in Western Kenya. I observed that the single women who deviated from the traditional norm in a village, and the single women who load a career and work in a city create mutual help relationship. So they form 'living-together family' in Nairobi city. I can say that it is the new way of life for single women.

Northern Uganda had the great cultural influence by the intervention from foreign countries because of the civil war over tens of years. Traditional marriage procedure collapsed, and the number of single mother is increasing. Furthermore, I observed that people started to think women's education is very important for their independent future.

From this study, I could show the importance and validity of focusing on "single" people to observe and analyze drastically changing societies.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学 文化人類学・民俗学

キーワード：シングル、寡婦、女性、結婚、離婚、ケニア、ウガンダ、社会変化、都市、村落

1. 研究開始当初の背景

(1) 「シングル」の研究といえば家族社会学や社会福祉研究をはじめ、開発と女性、ジェンダーなど分野で未婚の父母の存在が比較的扱われてきた。だが、それらは経済的な面に着目しその苦難に満ちた困窮状況の報告に留まるものが多い。従来の人類学においても家族・親族論は配偶者の存在を前提で論じられてきたため、そこから外れた、例えば「寡婦」というシングルについての研究は、ようやく実績が出始めたところである[椎野2007,2008]。

(2) 本研究に関連したアプローチとして特記すべきは、対象社会の政治経済的背景の歴史とそれに伴う家族形態や性に関する思考の変化、人々の生活戦術に注目したムトンギ

(1999)と小馬(2000)の研究である。前者は英国植民地行政による強制労働がケニア・マラゴリ民族社会にもたらした男性不在という家族構成の変化、それに伴うジェンダー役割や女性の発言権の拡大、特に寡婦の生活戦術を見事に描出している。後者はケニア・キプシギス社会における女性婚という、ハンディを負った女性に支えられてきた、嗣子を得るため正規の男女の結婚を陰で補完する意味合いが濃厚であった慣習を、女性達が現代的意味で再解釈し、近年増加するシングルマザーが生きる選択肢として利用しつつあることを分析した。外からの政治経済、文化に関わる変化の波を経験した社会において、「シングル」がいかなる生活戦術を創出しているかを分析する視点は、本研究がめざす方向性を同じくしている。

(3) しかし「シングル」を、結婚を前提に限定すると分析者が対象を恣意的に規定してしまうため、分析概念を検討する必要がある。またシングルを対象にする際に切り離せないのは、当該社会の既存のジェンダーやセクシュアリティに関わる社会的理念や信念と、それから外れたシングルの人を抱える性に関する実践の問題である。東アフリカ全般でセクシュアリティに関する思考と行動の変化による未婚の母の増加は指摘されつつも[Kawai 1998 等]、そうした変化の要因や、シングルとその子供の処遇などの社会の対応、シングル自身の生活戦術などについては詳細な研究が殆どみられず、今後展開が期待される。

<参考文献>

Kawai, Kaori 1998 “Women’s Age Categories in a Male-Dominated Society: The Case of the Chamus in Kenya”, In Eisei K. and Simon S. (eds.) Conflict, Age and Power. Oxford: James Currey, pp.147-167.

小馬徹 2000 「キプシギスの女性自助組合運動と女性婚——文化人類学はいかに開発研究に資することができるのか」、青柳まちこ(編)『開発の文化人類学』古今書院、pp.161-182.

Mutongi, Kenda 1999 “Worries of the heart’: Widowed Mothers, Daughters and Masculinities in Maragoli, Western Kenya, 1940-60”, Journal of African History 40.

椎野若菜編 2007 『やもめぐらし—寡婦の文化人類学』明石書店

椎野若菜 2008 『結婚と死をめぐる女の民族誌—ケニア・ルオ社会の寡婦が男を選ぶとき』世界思想社

2. 研究の目的

(1) 本研究は、植民地経験に端を発する西欧近代化、近年のグローバル化に伴い著しい社会変化をみせる東アフリカにおいて、さまざまな理由で単身の状態にある「シングル」の存在に注目する。

(2) 伝統的に結婚が重視されるアフリカ社会においてはマイノリティとされ、さして研究対象にもされてこなかった「シングル」であるが、実はどの社会にも存在する。彼/彼女らは社会のなかでいかに位置づけられ、むしろどのような役割を期待され、人間関係のネットワークを築き生活戦術を展開しているのだろうか。

(3) 近年のセクシュアリティに関する思考の変化に伴い、その地位や処遇はどのように変化しているのか。また国家による近代的諸政策は伝統社会における「シングル」にどのような影響をもたらしているのか。本研究では「シングル」の実態を調査し、その伝統的理念と実際、社会保障や女性の権利拡大等の近代国家政策との相関性を人類学的に考察し、最終的には社会変化の激しいアフリカ社会において、「シングル」が生きうる新しい可能性を探りたい。

3. 研究の方法

(1) これまで研究対象にしてきたケニア・ルオに加え、本研究で初めて対象とするウガンダ村落部のナイロート系民族社会において、「シングル」の社会的地位や生活戦術に着目してフィールドワークを実施し、基礎的な民族誌的研究を行うことに主軸におく。

(2) 対象民族が属するケニア共和国、ウガンダ共和国における「シングル」や性(ジェンダー、セクシュアリティ)に関する思考や行為、観念をめぐる社会文化の変化に関し、実地調査と過去の民族誌データとの比較研究を行う。先達の研究者とも議論のうえその変化を分析する。

(3) 英国植民地行政、独立後の政府による「シングル」や性に関する政策の変遷、政治経済の状況の移り変わりについての文献調査を行う。④実地調査を行うと同時に、その民族誌データを分析するためのメインテーマである「シングル」概念と研究方法の有効性を、隣接分野を参考にしながら検討し、文化人類学の立場から理論的に検討する。

4. 研究成果

(1) 本研究期間に、調査対象地であるケニアは節目の時期をむかえた。2010年8月末に植民地からの独立(1963)以降初めてのケニア人自身による憲法改正を行い、民族の違いに左右されないケニア人としての市民権、女性の権利も大幅に改憲されたと期待が高まった。とりわけ村落レベルとナイロビのような大都市での女性の生き方、シングル女性の境遇は大きく異なってきたため、社会変化をみるうえで「シングル」に注目する意味は大きいことがますます明らかになった。

(2) ルオ独特の伝統的慣習でコミュニティがなりたつ村落社会では、そもそもシングルであることがかつては許されず、現在も非常に難しい。そうした村からいわば排除された女性が都市にでて、また都市で学歴、キャリアをつんだシングルマザーの助けとなっている相互扶助の関係にあることも明らかになった。

(3) 一般にアフリカ社会では父権的思考が高学歴の男性の間でもまだ強く、パートナーである女性が自分より学歴が上で稼ぎがよいと嫉妬とプライドのためにうまくいかなくなる。それゆえキャリア女性のほとんどはシングルマザーか離婚、未婚のシングルが多く、ハウスガールやメイドとして村からのシングル女性とあらたな同居家族を築き暮らす人が多い。

(4) ウガンダにおいては、ケニアと同じルオ系のランゴ社会での調査に着手したが、同じ文化的基盤、イギリスによる植民地化という経験をもちながら、独立以降の国家体制の違いにより、社会変化の仕方が大きく異なることが如実に現れた。とりわけウガンダ北部は、長らく人びとを苦しめていた内戦の傷あとも大分癒えていることが観察された他方、次のような変化が調査できたことは重要である。避難するための移動、難民キャンプでの生活といった混乱のなかで外国からの援助、女性の権利に関する啓蒙活動等の影響もあり、ケニア・ルオの村落社会に比べ、いわゆる伝統的な手続きを伴った結婚がくずれ、シングルマザーが増加している状況が明らかになった。さらに、女性の就学と自立がより期待され、実践されつつあることが観察された。

(5) 日本におけるシングルのモデル—都市

生活におけるスマートな「シングルライフ」(海老坂武)のモデルから経済格差が生み出す「パラサイトシングル」(山田昌弘)、他方で女性の社会進出にともない晩婚化や非婚化の層が誕生し「アラサー」「アラフォー」という言葉が生まれ、さらには高齢化社会への危機感から生じた「老後のおひとりさま」(上野千鶴子)ブーム。こうした日本のシングルの状況と比して考えられるのはつねに欧米、アフリカの都市も日本の都市もヨーロッパも、世界の都市部では同じ現象がおきているのか、なにが違うのか。シングル文化/状況のグローバル化は世界の各都市で同じ状況が生じているのだろうか、という新たな大きな主題がもちあがった。

(6) 日本をはじめとする都市部において、そして例えばケニア、ウガンダにおいても、「シングル」の状況はめまぐるしく変化している。独立から半世紀近くたち自らの道を模索しながら四苦八苦しつつ歩むアフリカ社会が、近代化、民主化にむけて個人の生き方の選択が困難であった伝統的思考をどう変化させていくかをみるにつけても、「シングル」に着目することは有意義であることを示した。こうした本研究のいくつかの成果により、今後の世界における先進国、新興国における社会変化を「シングル」という視点でみる可能性が開かれたと思う。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

① 椎野若菜、「アフリカ研究とジェンダー：回顧と展望——人権と民主化の視点から報告2 コミュニティにおける慣習と女性：ケニア・ルオの村落から」『アフリカ研究』73, 査読無、pp.65-68, 2008年9月。

② 椎野若菜、「日本におけるアフリカ研究の始まりとその展開——国際学術研究調査関係研究者データベースを使って」『アジア・アフリカ言語文化研究』、査読有、75号、pp.97-107、2008年3月。

[学会発表] (計 7 件)

① Wakana SHIINO

"Memories of Changing Nairobi", Reading African Cities: Nairobi, Gondar, & Cape Town, Session I "Nairobi: Field 3D Mapping Project" ILCAA AFRICA Project, Venue: ILCAA, Date: 17th Nov 2011

② Wakana SHIINO, Charles Ndegwa (Jomo Kenyatta University) "How do We start a Joint

Research?: *Its Framework and Methods*", Approaches and Methodologies of Field Research in Africa Joint Symposium: JSPS NAIROBI + ILCAA AFRICA Project, Venue: JSPS Nairobi, Date: 1st to 2nd Sep 2011

③椎野若菜「ケニア・ルオ村落社会で公共性を考える—独立から『ケニア再生』の期待とのはざままで」アフリカ学会関東支部シンポジウム『『アフリカの年』から半世紀—過去・現在・未来』法政大学 2010年12月11日

④Wakana SHIINO
Aspect from Social Anthropology: '3D (three-dimensional) Mapping Project from the fieldwork: The expression about history and culture in Kenya', Gakushin Seminar in JSPS Nairobi On 31st Aug 2010.

⑤Wakana SHIINO,
'Aspect of Anthropology: Sickness from the View Point of Field Works', JSPS AA Science Platform Programme on Tropical Diseases in East Africa, "Multidimensional approach to Sickness in Africa", Venue: The multi-purpose hall/Conference Room of the Japan Information and Culture Centre of The Embassy of Japan, Date: 27th November 2008.

⑥椎野若菜、ミニ・シンポジウム「『シングル』の視点で社会をみる——人類学的試論」(高橋絵里香、植村清加、田所聖志、國弘暁子) 2008年11月8日(土)、椋山女学園大学星が丘キャンパス

⑦椎野若菜「ケニア・ルオ社会における儀礼的性交の意味」公開シンポジウム「セックスの人類学：動物行動学、霊長類学、文化人類学の成果」2008年6月28日(土) 主催・於：桜美林大学。

[図書] (計 6件)

①椎野若菜、「人生を印づけるたいせつな行事：結婚と葬式」、「大湖の民 —人びとの暮らしとその歴史、ケニアを生きる意気込み」、「宗教事情 — キリスト教土着化とイスラーム」『ケニアを知る 55章』松田素二・津田みわ編、明石書店。2012印刷中

②椎野若菜、「ゆるやかに、自立して生きる；北部ウガンダ、ランゴ女性たち」『ウガンダを知る 53章』pp.150-155(全 376)、吉田昌男・白石壮一郎編、明石書店。2012年1月。

③椎野若菜編著、『「シングル」で生きる—人類学者のフィールドから』全 256、(田中雅一、

棚橋訓ほか 13名、1番目、14番目) 御茶の水書房、査読無、2010年10月

④椎野若菜、奥野克巳、竹ノ下祐二と共編『来たるべき人類学シリーズ セックスの人類学』全 321、(奥野克巳、竹ノ下祐二、久世濃子、國弘暁子ほか (9名、6番目) 査読無、春風社、2009年。

⑤椎野若菜、「ケニア・ルオという「集団」：社会人類学からの点描」河合香吏編『集団—人類社会の変化』(河合香吏、足立薫、内堀基光ほか 16名) 京都大学出版会、査読無、pp.245-252、(全 364)、2009年12月。

⑥椎野若菜、『結婚と死をめぐる女の民族誌—ケニア・ルオ社会の寡婦が男を選ぶとき』、(全 400)、査読有、世界思想社、2008年4月。

[その他]
ホームページ等
<http://wakana-luo.aacore.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

椎野若菜 (SHIINO, Wakana)
東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・准教授
研究者番号：20431968